

# ギデنزにおける「担保を欠く批判理論」への一考察

富田 和幸

本稿の目的は A. ギデنزの「担保を欠く批判理論」をめぐる3つの諸疑念を、P. ウィリス『ハマータウンの野郎ども』に対する彼の評価を導きとしつつ、またその過程で P. ブルデューの視角を比較として援用することでクリアーに浮かび上がらせることにある。この3つの諸疑念は、彼の知識能力概念、社会学者の定義、制御の弁証法という考えに関わるものである。

## 1 はじめに

ギデنزの『第三の道 *The Third Way*』(Giddens 1998) は、1970年代後半まで先進諸国を支配していた「福祉のコンセンサス」の消滅、また1989年を画期とするソ連邦崩壊・東欧革命によるマルクス主義の威信失墜、そしてこれらの原因となったと思われるグローバル化による深刻な社会的・経済的変化、急激な技術革新といった現代社会の中で、「これからの社会民主主義政治」をめぐる論争に一石を投じた書となった。

「第三の道」とは、このような不透明な社会の中で旧来の古典的社会民主主義(旧左派)とサッチャリズムに代表される新自由主義(新右派)の双方が適切な政治的処方箋を提示できない袋小路の中で彼により打ち出された指針である。また「第三の道」自体の内容の吟味、評価については様々なところでなされてきている(Giddens ed. 2001 など)。

しかし、本稿ではこの「第三の道」それ自体の整理、論評をすることに焦点は置かれない。

というのも、そもそも彼はこういった政治的指針を積極的に打ち出すにたる理論的足場を有しているのかが問われてしかるべきと考えられるからである。

彼は主体-構造の関係性を問う構造化理論を踏み台として(Giddens 1984 など)、モダニティがより顕著に進行していくそれとして現代社会のあり方を提示した(Giddens 1990 など)。彼はさらに、グローバル化の進展を主要な軸のひとつとしつつ、「人間の知識の進歩と、社会や自然に対する『統制された介入』」がもたらす予測不可能な状態を「造り出された不確実性」と名づけ、この不確実性に対する我々の対処のあり方を何とか提示しようと模索し続けてきた(Giddens 1994)。論争の書『第三の道』はこうした流れに位置づけられうる。実際、この書は1994年の『左派右派を超えて *Beyond Left and Right*』(Giddens 1994)で体系的に示された「ラディカルな政治の未来像」をより直近の政治的・経済的・社会的動向をにらみながら平易な形でコンパクトに著し直したものとなっている。問題は、この『左派右派を超えて』で打ち出されている「ユートピア的現実主義 utopian

realism」である。この「ユートピア的現実主義」は「担保を欠く批判理論 a critical theory without guarantees に特徴的な見地」(Giddens 1994 = 2002: 313) とされる。しかしながら、自ら「批判理論」に「担保を欠く」ままで彼は旧左派や新右派のあり方を吟味し、かつ「より良い」指針としての「第三の道」を積極的に打ち出せるのであろうか？

この論考は、この彼の「担保を欠く批判理論」をめぐる考察に当てられる。その際、よりクリアーに考察を進めるために、ひとつの導入と、その導入で浮かび上がった諸疑念についてひとつの比較視角を用いたい。ひとつの導入とは彼が自らの構造化理論の観点から高く評価しているウィリス『ハマータウンの野郎ども』研究(1977)である<sup>(1)</sup>。また、ひとつの比較視角とは彼同様に主体-構造の関係性を問うブルデューのそれである。

まず『野郎ども』研究を導入とするのは、この研究に対してのギデنزの高評価の理由にこそ、彼の「担保を欠く批判理論」のエッセンスが反映されているためである。また、その際ブルデューを比較視角とするのは、こうしたギデنزの高評価、またその高評価を支える彼の基本的理論視座を相対化し吟味するためである。

さらに、ブルデューを取り上げることはそれ自体、ギデنزとブルデュー相互の位置づけに資するとも思われる。両者の理論的接近さはつとに指摘されている<sup>(2)</sup>。その点、全く異なる視角によるアド・ホックなギデنز批判を回避でき、また翻ってブルデュー理論の抱える問題点なども対照的に浮かび上がらせることも期待できよう。

そこで以下、本稿では次のような流れで話を進めていきたい。続く第2節では、ギデنزが『野郎ども』研究に対し何ゆえに高い評価を

付与するのか、またその彼の高評価にもかかわらず『野郎ども』研究において問われ続けているひとつの難問をそれぞれ整理し提示したい。そして第3節、第4節、第5節では、この『野郎ども』研究に対するギデنزの高評価に孕まれている3つの疑念をブルデューを比較視角に援用しつつ順次抽出する。最後に、これら考察から導くことのできる「担保を欠く批判理論」への疑念をまとめ、そこからギデنز、ブルデュー両者が直面せざるをえなかった根本的な社会学的論点にも言及したい。

## 2 『野郎ども』研究とギデنز

### 2-1 「担保を欠く批判理論」をめぐる

『野郎ども』研究の話に入る前に、ギデنزの「担保を欠く批判理論」をめぐる釈然としない点を大まかに示唆しておこう。

彼の立論によれば、社会の中の行為者(actor)達は「利口な clever」存在とされる(Giddens 1994 = 2002: 18)。その利口さゆえに彼らは社会・自然に介入し、意図せざる結果により不確実性は増殖を重ねる。さらにその増殖した不確実性を前に彼らは再度介入を試み続ける。これは強まるグローバル化、そして伝統がその位置づけを変えていくポスト伝統的社会秩序の出現と合わせ、「造り出された不確実性」の増加をもたらした発達のひとつである「社会的再帰性 social reflexivity」の広がりを指している。「脱伝統遵守を遂げはじめている社会では、人は、自分たちの生活状況と有意関連するすべての情報を精査することに慣れており、そのフィルタリングの過程にもとづいてごく普通に行為していかなければならない」(Giddens 1994 = 2002: 18)のだ。

例えば彼はここで結婚しようとする決心を取

り上げる。人はこの決心において、婚姻が過去数十年間でこうむった根本的変化、それにとりなう性習慣や性的アイデンティティーの変容などといった認識を動員する。しかし、この認識は単なる独立した社会的現実についての知識ではなく、実際に行為の中に適用された場合にはその社会的現実の実際のあり方に影響を及ぼす。よって、「社会的再帰性の増大は、知識と統制との関連の混乱——造り出された (manufactured) 不確実性の最重要源泉——をもたらす主要要因」(Giddens 1994 = 2002: 18) となるのである。

社会的再帰性の増大によって「造り出された不確実性」も増大するが、この不確実性を「統制」しようと「知識」による再帰性を行使すれば、その行使は新たな不確実性をもたらすという「混乱」。彼はこのような「知識と統制との関連の混乱」の中でそれでも「左派右派を超えて」「第三の道」といった積極的な処方箋を打ち出そうと(いわば、「知識」による「統制」をしよう)していることをまずはおさえておかなばならない。この処方箋が何故新たな「混乱」のもととならないのか、という疑問をも抱きながら、である。

このような混乱の中で打ち出されたユートピア的現実主義を「担保を欠く」批判理論として彼が位置づけざるをえなかったことはこれだけでも容易に窺える。そして、この「担保を欠く批判理論」をめぐる、さらに深く吟味をするに『野郎ども』研究に対する彼の高評価を考察することが有効な導きとなるのである。

## 2-2 『野郎ども』研究評価の3つのポイント

さて、ギデنز構造化理論の集大成ともいえる主著 *The Constitution of Society* (1984) では次のように述べられることで唯一ウィリスの『野郎ども』研究が構造化理論の経験的応用例とし

て絶賛されている。「私が提示しようとするように、それ(※『野郎ども』研究)は構造化理論の主要な経験的合意を非常に良く満たしている」(Giddens 1984: 289; ※は筆者による挿入)。

では具体的に彼はなぜ『野郎ども』研究を絶賛するのか? それは『野郎ども』研究においては以下の3つのポイントが遵守されていると彼がみなしているからである(Giddens 1984: 289)。

- A. 行為者の「知識能力 (knowledgeability)」を貧困に記述することを避ける必要性。
- B. 動機付けに関する洗練された説明。
- C. 制御の弁証法 (dialectic of control) についての解釈。

まず、「A」の知識能力についてだが、ギデنزズはウィリスが、「彼ら自身がその一部となっている学校環境について言説的・暗黙的に非常に多くのことを知っている (know a great deal) 行為者として少年達を扱っていること」(Giddens 1984: 289) に賛辞を寄せる。そしてこうも述べている。「言説的意識、実践的意識の両レベルにおいて、順応的な生徒達——教師達の権威や彼らの教育上の目標に反抗するのではなく、多かれ少なかれそれらを受容する者達——が最も学校の社会システムについて知識能力ある (knowledgeable) かのように見える。しかしながら、意識の両レベルで『野郎ども』の方が順応的な者達よりも知識能力があるとする点でウィリスは良い主張をしている」(Giddens 1984: 290-1)、と。

次の「B」は「A」と深く関わり合っており、敢えて峻別する必要のないものと思われる。ギデنزズによれば、ウィリスは「野郎ども」を知識能力ある行為者と見なすことで、教育機会の

重要性を正しく評価できない「無骨者」といった学校側の「公式的」見解による「野郎ども」の動機付けの説明を退けることが可能となっている、と評価する。あくまでも、「彼らがそのように行動するのは、学校、そして彼らが移動していく他の文脈について彼らが非常に多くのことを知っているから」(Giddens 1984: 291)なのである。

最後の「C」。これは幾分かの説明を要する。「ウィリスは非常に洞察力に富んだ方法で学校的状況の中での制御の弁証法を記述している」(Giddens 1984: 292)とギデنزの評価するが、この「制御の弁証法」とは一体どういったものか？ この概念は次のように解説されている。「権力の配分的側面(制御としての権力)の有する双方向的な特性。制度化された権力関係でより権力の面で劣る者がいかにしてより権力の面で勝る者に対して制御を行使できるように諸資源を巧みに取り扱うか、ということを目指す」(Giddens 1984: 374)。

例えばギデنزがウィリスの描いた先生—「野郎ども」関係の中に「制御の弁証法」を見出すのであるが、ここでは杉山光信の言を借りよう。『野郎ども』研究を評する最中で杉山は「教師への反抗」についてこう記している。「学校制度特有のこまごまとしたことのあらゆることにかこつけて反抗はなされ、教師もそれに気づく。というより、落ちこぼれたちの教室にいる教師は、騒ぎが『謀略か否か見分ける才覚』なしにはつとまらない」(杉山編 1989: 9)。反抗は本当に教師を怒らせてしまう手前で巧みに「ふざけ」として行使される。まさしく、先の「制御の弁証法」の定義がそのまま当てはまる状況をウィリスは描いていることとなる。

## 2-3 3つの疑念——『野郎ども』研究に残されたひとつの謎を導きに

以上、『野郎ども』研究に付与するギデنزの高い評価の理由を3点明示した。ここから彼がどのような点に力点を置きながら自らの構造化理論を組み上げていったかが窺えてくることだろう。

しかし、である。彼の「担保を欠く批判理論」を吟味する本稿の関心からは、ここで『野郎ども』研究それ自体における重大な謎を指摘しておかなくてはならない。それは、ギデنزが上記3点に渡って『野郎ども』研究を評価したとしても残り続ける謎であり、また、彼自身があまり焦点化しない謎ともなっている。例えば小内透は『野郎ども』研究に対し次のようにその重大な問題点を投げかける。「……ウィリスの再生産論において重要な位置を占める、労働者階級とその子弟の学歴や教育達成に対するアスピレーションの取り扱いが一貫していない。ウィリスの場合、反学校文化の担い手である労働者階級の子弟は高い学歴や教育達成を望まず自ら進んで労働者の道を選択し、その結果社会関係の再生産が貫徹されるとしている。……にもかかわらず、ウィリスは同時に、次のように、〈野郎ども〉が職場に入ってしまったらと、自らの価値判断が間違いであったことに気づくという指摘を行っている」(小内 1995: 174)、と。

工場にたどり着いた「野郎ども」はそこで後悔する。そしてウィリスは彼らの悲哀を正面から受け止めようとしている。となれば、それが「悲哀」であるのならば、「自ら進んで選んだ労働者の道が失敗であり、その背後にある成績証明や教育制度に対する〈野郎ども〉の価値判断も誤ったものであるということになるはずである」(小内 1995: 174)。小内は畳み掛ける

ようにして問いかける。「しかし、実際にはウィリスはこの点に関する〈野郎ども〉の価値判断を洞察のモメントとしている。それは、なぜか。この点が説明されなければ、論理が一貫しない。また、ここでの指摘からいえば、〈野郎ども〉の主體的な選択としての生産的労働への従事は、現実の世界を十分に理解しない行動の結果だったということになる。いわば『若気のいたり』ということである」(小内 1995: 174)。

確かに、ウィリスは「野郎ども」の振る舞いに見られる「洞察」も「制約」もともに気づいていた。しかるに彼はそれらの折衷ともいえる「部分的洞察(異化)」概念を提示し、根拠薄弱なままでそれを称揚することで『野郎ども』研究の議論を閉じているともいえる(特に Willis 1977: 第4章以降)。

この小内の提示する『野郎ども』研究に残された重大な謎の指摘を受けて、翻って次のような一連の疑念をギデンズに対して提示できよう。まず、彼にあっては「野郎ども」は知識能力を有する。いや、もっと直截に「利口な clever」な存在である。しかし、小内の問題提起を前にそれでも「利口な」という形容を「野郎ども」に付与し続けることは妥当なのであろうか？次に、こうした対象たる行為者の知識能力についての評価という問題は、その評価をなす側の社会学者の位置づけの問題にもはねかえってくることだろう。最後に、階級構造の中で劣位にある者が劣位の位置に到達する「悲哀」を前に、ギデンズは「制御の弁証法」を唱え続けて足れりとするのであろうか？

これら『野郎ども』研究におけるギデンズの高評価の裏側に垣間見える3つの疑念は、そのまま彼の構造化理論に対する3つの疑念となり、ひいては彼の「担保を欠く批判理論」を吟味する足がかりとなる。続く第3節、第4節、

第5節では、ブルデューを比較視角として援用しながら、これら3つの疑念を敢えてクリアーになるよう順次提示していきたい。前もって本稿でギデンズに投げかけるこれらの疑念を以下のように要約しておこう。

- ①ギデンズ構造化理論は社会のダイナミックな変動を説明するには好都合であるものの、「社会は変わり続ける」ということが言明できるだけであり、「では、どのように変わるべきか」という論点に対しては至極曖昧な応答しかできない。
- ②①と関連するが、何が正しい認識足りうるかという「真理(のよなもの)」の基準に踏み込む足場を半ば放棄している。これは社会学者の役割の曖昧さにも反映されている。
- ③「制御の弁証法」により、どの各行為者も常に権力を有するとされているが、逆に各行為者に配分されている資源量の多寡、さらにそれともなう権力の非対称性への分析の踏み込みが希薄となっている。

### 3 知識能力ある行為者をめぐって——ギデンズにおける「変動」

#### 3-1 知識能力と実践的意識

『野郎ども』研究に対するギデンズの高評価において、行為者の知識能力、「利口さ」の彼による強調が妥当であるか否かが疑念として浮かび上がってきた。本節では、彼が行為者の「利口さ」を強調する理由を概観した後、彼の念頭に置く社会変動のあり方をも浮かび上がらせることにしたい。

まず、ギデンズ構造化理論の中核ともいえる記述を引用しよう。「構造の二重性は、時間-空間を超えた社会的再生産における連続性の主

要なグラウンドである。それは逆に日常的社会活動の持続 (durée) の構成において、かつ構成としての行為者の反省的モニタリングを前提としている。しかし、人間の知識能力は常に限界づけられている。行為の流れは継続的に行為者達には意図されない結果を作り出し、そしてこれらの意図されざる結果はフィードバックされるかたちで行為の知られざる条件をかたちづくりもする。人間の歴史は意図的諸活動によって創造されるが、ひとつの意図されたプロジェクトではない」(Giddens 1984: 26-7)。この引用から分かるように、たとえ彼が「利口な」という形容を行為者達に与えても、その知識能力の範囲には限界がある。ただ、彼の構造化理論は、この知識能力の限界を前提としつつも行為者達の「利口さ」を強調する方向に論を誘導する傾向が内包されているのだ。

構造化理論では、行為者の階層モデルとして「反省的モニタリング」「合理化」「動機付け」の3つの層が設定され、それにほぼ対応する意識の層が「言説的意識」「実践的意識」「無意識」とされる (Giddens 1984: 5-7)。問題は特にこの「実践的意識 practical consciousness」の性格付けにある。図式的に考えれば、「反省的モニタリング」は「言説的意識」のみに担われていることとなる。だが、ギデنزは「反省的モニタリング」の多くは「実践的意識」によって担われていると考える。

実践的意識とは、「行為者が特に自らの行為の条件を含めた社会的諸条件について知っている (know) (信じている believe) ことであるが、言説的には表現できない」(Giddens 1984: 375) ものであり、これは以下の知識能力の定義の中に含みうる性格付けとなっている。「行為者自身の活動と他者のそれを取り巻く状況について行為者が知っている (know) (信じている believe)

全てのことであり、それはその行為の生産・再生産の際に依拠され、また暗黙の知識はもちろん言説的に利用できる知識をも含む」(Giddens 1984: 375)。つまり、「暗黙の知識」とあるように実践的意識の層でも、「知る know」という行為者の知識能力が強調されていることが窺えるであろう。こう考えると、先ほどの「野郎ども」の言説的意識だけでなく、実践的意識も「知識能力」として高い評価の対象となることが分かってくる。

### 3-2 「利口さ」の理論的前提

このような実践的意識のレベルにおいても行為者における知識能力、「利口さ」を彼が強調し、肯定的に評価するのには恐らく2つの理論的な理由があると思われる。ひとつはイデオロギーと行為者の知識能力との関係に関わり、もうひとつはモダニティ論以降の再帰性概念の使用のされ方にあらわれている。

まず、イデオロギーと知識能力との関わりをみてみよう。例えばギデنزは次のように言う。「社会的諸関係の物象化、言い換えれば歴史的に偶然的な諸状況や人的行為による生産物の言説的『自然化』は社会生活においてイデオロギーのひとつの主要な相となっている。しかしながら、たとえ最も露骨な形式の物象化された思考にしても、人間の行為者の知識能力の有する根本的な重要性にはタッチできないままである。というのも、知識能力とは実践的意識ほどには言説的意識に依拠していないからである」(Giddens 1984: 25-6)。ここでギデنزはいデオロギーを言説的意識の層に押しやり、敢えて言えば知識能力の「避難所」として実践的意識を確保していることが窺える<sup>3)</sup>。

しかし、である。イデオロギーは実践的意識にノータッチなのであろうか？ ここでブルデ

ューを比較視角として援用したい。彼はギデンズと同様に実践 (pratique) <sup>(4)</sup> という行為者の日常的な何気ない振る舞いに着目することで主体—構造の二項対立を止揚しようとした点では同じである<sup>(5)</sup>。しかし、彼にあってみれば、この実践のレベルでのイデオロギー的効果が重要な論点となっており、それは象徴暴力論にまで展開していくものとなっているのだ。

例えば彼はオリーブ採集における作業の分割において、まっすぐに立って (棒でたたき) 落す男と身を屈めて拾い集める女との身振りの対立などは、直線/曲線、硬直/柔軟といった対立が再翻訳されたものであり、誤って価値の諸体系として記述される対立の体系はこのように自明の身振りの中に実践的に浸透することからその象徴的效果を引き出す、と指摘する (Bourdieu 1980 = 1988: 114)。そして次のように述べる。「社会的空間の中で限定された一つの位置 (position) に付着する社会的諸規定は、自分自身の身体への関係を通して、それぞれの性的同一性を構成する心的傾向 (disposition) (物腰、語り方、等々) を、そしておそらくは性的適性自身をも作り上げる傾向にある」 (Bourdieu 1980 = 1988: 115)、と。こうした位置 (position) と心的性向 (disposition) の対応は恣意的であるはずの分類を自明なものとする。これはギデンズのいう言説的意識のレベルではなく実践的意識のレベルで作用しているからこそ克服しがたい恣意的な分類となるのである。

ただ、ここまでなら象徴的「暴力」とは言えない。これは「単なる差異」でしかないから。差異を構成する一方の項が他方よりも優越する価値付けを与えられている限り、そして、それが身振りによって維持されていくことに暴力性が宿るわけであり、実際のところ上記の例は男性の優越性を確保している。厄介なのは、これ

を男性も女性も例えば自らのアイデンティティの手がかりなどとして自明視してしまうことで、そもそもの支配関係も自明視されてしまうカラクリが控えていることだ。

このようにブルデューの立場から考えると、実践的意識を知識能力の「避難所」としてしまふギデンズの先のロジックには確固たる根拠が希薄であることが分かってくるであろう。

ギデンズにおけるモダニティ論以降の再帰性概念の使用のされ方にも触れておこう。先にも触れたが彼にとっての現代社会は「社会的再帰性」の増大する社会である。そして、「再帰性の強まる世界は、《利口な人びと clever people》の世界である」 (Giddens 1994 = 2002: 18)、とされる<sup>(6)</sup>。「利口な人びと」が再帰性を行使し、急激に社会システムを組み替えていくという能動性がここでは強調されていることが分かるであろう。行為者はモダニティの進行にともなうてどんどん利口となるのである。

### 3-3 ギデンズにおける「変動」

以上の2つの点により、ギデンズが『野郎ども』研究評価において行為者の知識能力、「利口さ」に寄せる一見楽観的とも思える肯定的評価の理由が垣間見えてくることであろう。ただ、そこには「変動」概念をめぐる、より根底的理由が控えているのだ。

主意主義と決定論の対立を乗り越えようとしたギデンズは、究極の関心として、「『ある社会システムの特徴が生まれ/存続し/変化するためには、何が起らねばならないか』の探求」 (Giddens 1979 = 1989: 125) を挙げ、そして、この社会システムの再生産と変動との関係を次のように述べている。「およそ社会的再生産は、社会的文脈にある行為者が、彼がよく知っている規則や資源を適用し再適用することに

基礎づけられている。逆にいえば、再生産をみちびく相互行為は、それに参加する人びとによって偶発的に『中断』されることがある。要するに、社会システムはつねにそれを構成する人びとによって生みだされ再生産される。したがって、……変動あるいは変動の潜在性は、社会的再生産のあらゆる契機に内在するのである」(Giddens 1979 = 1989: 125-6)。

彼にとって、社会的再生産のあらゆる契機に内在する変動あるいは変動の潜在性の源泉こそ行為者なのであり、これは「人間行動の『過程』としての目的的性格、『意図性』の強調」(貝沼 1996: 235) のために外せないポイントとなっている。例えば、ある言語の文法構造など、その言語で日常生活を送る人々はその文法構造を言説的に意識しているわけではなく実践的意識のレベルでその言語を使用しているのであるが、その使用を通じて文法構造を再生産すると同時に時間の流れの中でその文法構造は微妙に変化していく。この構造の二重性の議論において、行為者の重要性、つまり行為者の反省的モニタリングや実践的意識、知識能力、「利口さ」は非常に肝要なものとならざるをえない。

確かにブルデューにあっても、この構造の二重性の議論のように社会システムの再生産とその変動には行為者(agent)の存在は肝要であり、その点、実践レベルでの行為者の振る舞いも重要である。しかし、この実践のレベルで暴力が作動し、支配の再生産に寄与し続けるのなら、ブルデューにとって行為者を「利口な」と形容することは即断の謗りを免れないであろう。

このギデنزとブルデューの間にある違いは「変動あるいは変動の潜在性」をどう考えるかにある。これは、『野郎ども』研究に対するギデنزの肯定的評価を手がかりにしてその根本となる由来を突き止めることができよう。そ

もそも彼が「野郎ども」の「利口さ」に目を奪われたとすれば、そこに社会の変動あるいは変動の潜在性を見出せたからと考えられる。ただ、こと『野郎ども』研究においては以下のように考えるしかギデنزの念頭に置くであろう変動あるいは変動の潜在性はその位置づけを失うであろう。a) 「野郎ども」が親の階級と同じ肉体労働者となる点では社会システムは再生産されている。b) だが、子供世代の社会システム Y は親世代の社会システム X とは同一のものではない。c) なぜなら、社会システム X には子供世代は参入していなかったから。そもそも再生産とは全く同一なものの完全な再生産ではありえない。

ギデنزにあっては先の社会的再帰性の広がりという考えなども合わせ、とにかく「新しい状態」の出現が社会の「変動」とみなされている。その判断の際には、「野郎ども」が結局は親と同じ肉体労働者に到達する悲哀という側面は背景に退いているといえるだろう。このような変動観で『野郎ども』研究を眺める限り、ギデنزの先の高評価は納得できる。しかし、「変動した後の社会がどのようなものであるのか」「それは望ましい社会であるのか」といった論点は、彼の変動概念とは切り離されている。そして、これはこれらの論点を変動概念に組み込む論者と比較し、ギデنزが相対的には容易に社会の中に変動を見出せる道筋をつけることともなっているのである。

#### 4 社会学者の役割——ギデنزにおける「批判」

##### 4-1 社会学者の役割をめぐって——ギデنزとブルデューの違い

ブルデューがギデنز的な変動概念を有しえ

ないのは明らかだろう。彼にあっては実践レベルも含めた行為者の知識能力、「利口さ」の強調は逆に現状の支配関係を自明視することに連動していくものとして強く忌避される。つまり、全ての再生産は純粋な再生産でないという点で彼はギデンズに首肯するであろうが、望ましい社会のあり方と切り離された変動概念の使用は峻拒するであろう。

したがって、ブルデューはギデンズとは違い、あるがままの行為者を称揚することはしないし、まして「利口な」といった形容を付与したりはしない。というのも、彼にあってみれば、社会空間における位置 (position) とそれに対応した心的性向 (disposition) との関係、それを基盤とした不平等含みの社会の再生産という事実の認識を踏まえたと、いわば行為者たちの「幻想の払拭」こそがまずは重要だからである。すると一般の行為者とそれを観察する社会学者との間には以下のような差が設けられることになる。

ブルデューにとって、社会学者はとりわけ知的実践の社会的決定因のありかを言明することにより、それらの決定因に対する一定の自由の可能性を与えることに貢献する存在である。つまり、「誠に逆説的ですが、社会学は、人を自由の幻想から解放することによって、人を自由にするのです」(Bourdieu 1987 = 1991: 30)、と。ここではギデンズのような行為者の「知識能力」「利口さ」の強調は「自由の幻想」を鼓舞するものとしかならない。社会学者はこの「自由の幻想」から一般の行為者達を解放するといったプロセスで重要な寄与をせねばならず、それを踏まえ続けることが真の自由なる主体へと漸近する道だ、というのがブルデューの基本的スタンスなのである。

翻ってギデンズならばどうであろうか？ 一

一般の行為者達にも積極的に「知識能力」を認める彼にあってはブルデューのような一見エリート主義的な社会学者像は許容できない。ここで登場してくるのが「二重の解釈学 double hermeneutic」である。「社会学者は研究フィールドとして既に有意義なものとして構成されている現象を有している。このフィールドへの『参入』の条件は、行為者達が社会生活における日常諸活動の中で『上手くやっていく』ために既に知っていることや知らねばならないことを徐々に知るようになることである。社会学的観察者たちが自らがその行動を参照する相手たる行為者の側にある程度の概念的能力を仮定する限りにおいて、観察者たちが発明する概念は『セカンド・オーダー』概念である。しかし、社会生活それ自身の中に受容されることによって『ファースト・オーダー』概念になりうることこそは、まさしく社会科学の本質にあるのである」(Giddens 1984: 284)。既に一般の行為者達によって解釈されていることを知ろうとし、それが社会科学特有の概念に結晶化する。しかし、その発明された概念は再び実際の社会生活において一般の行為者によって利用されるに至るのである。

#### 4-2 ギデンズにおける「批判」

実はこれまでギデンズにとっての「批判」とは何かについて言及していなかったが、この二重の解釈学に彼は自らの「批判理論」としての根拠を求めるがゆえに先のような彼特有の変動概念が導かれていることをおさえておく必要がある。「構造化理論とは仮にそれが批判理論としての社会科学の捉え方に結び付けられないのであれば本質的に不完全なものである」(Giddens 1984: 287) と彼は述べるのであるが、彼によれば社会科学の有する批判的特質は以下

のところにある。「社会学で構築される概念には、連続的な『ずれ』が存在する。その『ずれ』によって、社会学の概念は、もともと人びとの行動を分析するために創りだされたとはいえず、そうした分析対象となった人びとによって充当利用され、したがって（それゆえ、現実には、社会科学の専門述語体系における当初の用法に潜在的に影響を及ぼすかたちで）、人びとの行動の《有する》不可欠な特性となる傾向がある」（Giddens 1993 = 2000: 276）。

ギデنزはこの「ずれ」による社会学概念の人々への影響を「実践的なインパクト」（Giddens 1984: 348）、「構成的な特質」（Giddens 1984 = 2000: 353）と呼び、それを「批判的特質」と同一視している。しかし、注意しなければならないのは、ギデنزはそのような社会学概念が行為者達に「充当利用」されるとして、その充当利用のされ方、それにともなう社会の変化のあり方といった論点はオープンにしている点である。つまり、マキャベリの理論がその後社会にどのような様々な充当利用を行為者達にされたのか、またどのような社会をもたらしたかといった点ではなく、とにかく社会のあり方に影響を与えたということ自体にその「批判的」な特質が求められているのだ（以上、Giddens 1984: 特に 348-54）。

ここでは先の彼特有の変動概念の特徴がパラレルなかたちで再現されていることが分かる。行為者達が知識能力や「利口さ」を発揮しながら社会を「変動」させると彼が見なせたのは、「変動した後の社会がどのようなものであるのか」「それは望ましい社会であるのか」といった論点と切り離されているためであった。同様に彼特有の「批判」理論もこういった論点とは切り離されているのである。

#### 4-3 ギデنز的批判概念の理論的前提

ただし、彼の「批判」概念のこの特有さには実はそれなりの問題意識が控え、それがひいては彼自身をして「担保を欠く批判理論」と吐露せざるをえない状態をもたらしたことに言及しなくてはならない。2点指摘できる。どちらも社会科学における啓蒙主義的な自然科学モデルの峻拒に由来するのであるが、ひとつは彼のいう「批判的意志の麻痺」との関係、もうひとつはイデオロギーとの関係に関わっている。

まず、前者から。これは「正統派の社会学」による自然主義の仮定に依拠した「過度に単純な社会科学の啓示モデル」のギデنزによる拒絶に端を発する（Giddens 1979 = 1989: 273）。社会学の目的は人々の通念を吟味することにあるのだが、自然科学と違い社会研究は行為者の思い込んでいる行為の諸条件や社会状況の正しさを証明しても、その発見は啓示的どころか陳腐でしかないという「社会学の素人批評」（Giddens 1979 = 1989: 70）が寄せられる。それに、そもそもの構造化理論によれば、社会の全ての成員は確かに社会に参加することによって社会の働きについて多くの知識を（実践的かつ言説的に）もっているため、社会学者はこれを真面目に考慮すべきであり、よって「素人批評」は尊重されねばならない。ただ、それだと「批判的意志の麻痺」をもたらしかねないのだ。というのも、彼らが日常諸活動の中で「上手くやっていく」ことができるのには彼らにとって依拠できる「相互的知識」があるからであり、社会学者はその彼らの相互的知識を再発見することで自らのそれまでの立ち位置からでは不合理に思えたものを理解可能なものにする必要があるためである（Giddens 1979 = 1989: 273）。これは彼らの振る舞い、そして相互的知識の現状維持に努めるよう社会学者に強いるものとなりかねず、

これにギデنزが警鐘を鳴らすのである。

先に「ずれ」という点について触れた。ギデنزにあっては社会学者は対象たる行為者たちと一致してはならず「ずれ」ていなければならない。でなければ、そこに彼にとっての「批判」的要素は消滅するためである。そこで次のような峻別を彼は設ける。「われわれは言語ゲームの解釈学的な出会いの必要条件である信念の確かさにたいする敬意と、もうひとつの信念の正当化にかんする批判的評価とを区別しなければならない」(Giddens 1979 = 1989: 273-4)、と。このうち「言語ゲームの解釈学的な出会いの必要条件である信念の確かさ」の側面が「相互的知識」とされ、「信念の正当化」の側面が「常識」とされるのだが、しかし一体いかにそうした峻別ができるのかへの考察は深められていない。「批判的意志の麻痺にたいして屈すべきではない」(Giddens 1979 = 1989: 275) という当為的宣言が置かれるに留まる。

つまり、こうなる。自然主義的な啓蒙的スタンスの峻拒を二重の解釈学という考えにより果たしたが、今度はその二重の解釈学によって「批判的意志の麻痺」という危険性をギデنزに導いてしまった。だが彼は啓蒙的なスタンスに社会学を揺り戻すことはできない。それゆえに担保を欠きながらも、それでも批判理論であるという意味で「担保を欠く批判理論」を当為的に主張せざるをえなくなっているのだ。

次にイデオロギーとの関係に移ろう。イデオロギーを扱う視角としてギデنزが「非-科学」としてのイデオロギ一定義を回避する。それは科学や「有効な知識」をイデオロギーから分離するというのは「無理難題」(Giddens 1979 = 1989: 204) だからである。ここにも自然主義に密接に結びつく啓蒙主義の「偏見批判の伝統」との訣別が提唱されていることが分かるだ

ろう。そして、「イデオロギーという考えの最大の有効性が支配の批判にある」(Giddens 1979 = 1989: 206) とみなし、イデオロギー分析の議論を彼は進めていく。だが、「いかなるタイプの思想体系もイデオロギー的なものだ」(Giddens 1979 = 1989: 207) と考える彼にあっては、イデオロギー的な側面をとともなうであろう自らの構造化理論でどのように他のイデオロギーを「批判的に」分析するのであろうか？

確かにブルデューのように「解放者」を自認することはギデنزにあっては誤った自然主義的な啓蒙モデルの採用なのであり峻拒すべき姿勢であろう。また自らのイデオロギー性への繊細さのなさという点で回避されるべきものでもあろうか。ギデنزにおける先に触れた「変動」、さらに「批判」概念の有する顕著な特徴はこのような自然主義的な啓蒙モデルへの誘惑を断ち切ることに派生したのであるのだから。

しかし、である。「批判的意志の麻痺」、イデオロギーの扱いに対して難渋しつつ「担保を欠く批判理論」と控えめに自称するギデنزには、さらに知らぬ間に踏み越えてはならない一線から足を踏み出してしまおう。例えば彼は社会的再帰性の広がりによる「知識と統制との関係の混乱」のなかで「第三の道」といったオルタナティブな主張を積極的に主張するのであった。しかし、彼にとっての「変動」や「批判」は、「変動した後の社会がどのようなものであるのか」「それは望ましい社会であるのか」といった論点とはそもそも無関係に成立する。一方で「知識と統制との関係の混乱」自体を「統制」しようとする「第三の道」という「知識」の提唱があり、他方では自然主義的な啓蒙的なスタンスを峻拒するギデنزがいる。ここで聞きたい。『第三の道』は啓蒙の書なのかそうではないのか、と。

## 5 制御の弁証法と社会空間

最後に残されたギデنزへの疑念を扱うとしよう。彼にとって行為 (action) とは次のように権力と不可分のものとされている。「別様に (otherwise) 『行為』 できるということは、ある状況において特殊な過程あるいは状態に影響を及ぼす効果を維持しながら、世界に介入できたり、そうした介入を控えることができることを意味する」(Giddens 1984: 14)。これは行為が「変換能力という意味での権力」(Giddens 1984: 15) を論理的に含んでいることを意味する。つまり、行為はすべからず権力を含んでいるため、行為をする行為者はすべからず権力を有している、ということになるのだ。

例えば貝沼洵はこれを「権力の遍在」(貝沼 1996: 260) と呼び、こう述べる。「諸資源の配分がどんなに非対称であっても、権力関係は、囚人などの徹底的に拘束され監視されている人間は例外として、他のすべての場合に、すなわち『あらゆる関係のなかで人間の主体的行為が発揮されるすべての場合』に、すべてに『互酬的』で『両方向』における自律と従属を示しているのである……。いふなれば、きわめて抑圧的な形態の集団や組織においてさえ、従属者が諸資源を制御しようとするたたかいに参加しているのである」(貝沼 1996: 260)。

確かにそうであろう。ただ問題は、「野郎ども」には「(部分的) 異化」の能力がウィリスによって認められ、それをギデنزが「知識能力」「利口さ」と呼びかえて賞賛したとしても、「野郎ども」がその「(部分的) 異化」や「知識能力」「利口さ」のゆえに再生産プロセスにがちりと組み込まれるという逆説を前にして、「制御の弁証法」あるいは「権力の遍在」を見

出すのみで十分なのであろうか、という点にある。

ウィリスを比較対照としブルデューにとっての「対抗文化」を体系的に論じた大前敦巳は、「耳穴っ子／野郎ども、学校文化／反学校文化……」といった『野郎ども』研究にみられるカテゴリー間の重層的な関係を指摘しつつ、「ウィリスの文化生産の概念は、先に挙げたカテゴリー間のうちの片側に立ち、それと対立する側に対して『抵抗 (resistance)』を行うことに結びつけられていく」(大前 1992: 45) と指摘する。そして、ここに被支配者の逆説があるわけであり、ブルデュー的な視角から以下のようにそれを論難する。「しかし、ブルデューは、このような『抵抗』には逆説的效果がともなっていることを指摘する。この逆説的效果は、『抵抗』か『服従』かという二者択一に閉じ込められてしまうと理解できなくなる。なぜなら、『抵抗』を行うということ、言い換えれば、被支配者のカテゴリーの側に立つということは、それと対立する支配者の側との関係を承認し、かつその関係を固定化するプロセスを通過するために、結果としては、支配者の側の論理に『服従』することを意味するからである」(大前 1992: 45)。

この逆説は、先にも触れたギデنزとブルデューとの決定的な差異、つまり行為者の知識能力、特に実践レベルでの知識能力である「知る」の強調か否かにその源をさかのぼることができよう。ブルデューによれば、男女の不平等にしても、何気ない振る舞い、何気なく社会に投影するカテゴリーといった実践のレベルで象徴的暴力が行使されているのであった。それは容易には行為者本人は把握することができないものであるがゆえに、不平等は維持される。一見「抵抗」と思えるものが実は「服従」を意味するとき、ブルデューはその状態に対して「制

御の弁証法」あるいは「権力の遍在」という言葉が付与しただけに留まることはできない。

では、この象徴暴力の作動を解明するためには何を見る必要があるとブルデューは考えたか？ 彼によれば「抵抗」が「服従」に容易に転化してしまうのは各行為者の視野の狭さによる。よって、各行為者は社会空間における自らの位置 (position) とそれに対応する心的性向 (disposition) をまずは把握しなければならない。ギデンズとブルデューは各々「資源」、「資本」という同様のことを意味する概念を使用しているが、両者の決定的な違いは、この「資源」あるいは「資本」の種類・量などによって各行為者が社会の中でどのように位置づけられているかという見取り図のようなものを設定するか否かである<sup>⑩</sup>。ブルデューは、例えば主著『ディスタンクシオン』(1979)において、資本の総量を縦軸に、また経済資本と文化資本の比率の多寡を横軸に各行為者を位置づけ、その位置に対応した各行為者の様々な実践を分析している。この「社会空間」における行為者達の布置状態の分析を媒介として彼は一般の行為者を「自由の幻想から解放」しようと模索する。

対してギデンズは、こと『野郎ども』研究評価では「制御の弁証法」をそこに見出し賞賛するに留まっている。彼の「変動」「批判」概念には「変動した後の社会がどのようなものなのか」「それは望ましい社会であるのか」といった論点を前提として組み込みにくいことが、このような支配関係へのより深い考察を彼に妨げさせているとも考えられる。

## 6 まとめ

ギデンズにおける「担保を欠く批判理論」への以上3つの疑念を手短かにまとめよう。まず、

彼は社会システムの再生産の渦中に変動あるいは変動の潜在性を確保しようと行為者に注目し、そして知識能力に注目した。ただ、その行為者の「利口さ」は多分に楽観的に見積もられている。特に実践的意識のレベルでそうである。これは彼の変動概念が、「変動した後の社会がどのようなものであるのか」「それは望ましい社会であるのか」といった論点とは切り離されて設定されていることによる。再生産の中に広い意味で変動は起こるかもしれない。しかし、それは「変わり続ける」ことを指し示すだけで「より良い社会」をもたらすかどうかは彼にとってレレヴァントではなく、いわば偶然に委ねられている。

この変動概念の特殊性とも関連するが、またギデンズは社会学者の役割に関しても曖昧である。確かに彼が反自然主義の姿勢をとる理由には共感できる。しかるに、その代償に社会学者は啓蒙的・啓示的スタンスを安易に取ることができず、自らの理論に「批判」的側面を確保しづらい状況をまねく。それでいて彼は『第三の道』のような「良き社会」像を語るという一見啓蒙的な勇み足をする。「担保を欠く」という苦しさの中でそれでも彼は「批判」をせざるをえないのだ。先の変動概念に「より良い」といった基準を持ち込めないのも彼には考えあつてのことであるのがここに窺えるであろう。

最後に制御の弁証法である。より詳しく言えば、権力の多寡をより詳細に分析する見取り図を用意しないことであるが、これは先の2つの論点により行き着かざるをえなかったギデンズの批判理論の「担保のなさ」の副次的効果である。権力の多寡が詳しく分析されないのならば、行為者の知識能力、「利口さ」は「良き社会」に向けての方向感覚を前もって有することができない。ただ、そのような「見取り図」を

社会学者が提示することは、各行為者それぞれの視野をはるかに越える鳥瞰図を示すこととなるため、彼にあっては自然主義的な啓蒙的・啓示的スタンスとして回避されてしかるべきものだろう。彼にとっての批判理論はとにかく社会が「変わり行くこと」そのものに貢献することだけに禁欲的に制限されねばならないのだ。

なお、ブルデューもギデンズ同様に「実践」に目を向けることで主体-構造の二項対立を乗り越えるべく自らの理論を練り上げていき、グローバル化に代表される現在の不透明な時代状況に対して社会学者として何がしかのことを言わんとしている。ただ、それはギデンズと比べればおよそかけ離れている。ブルデューにあってみれば、敢えていえば「自由の幻想」に踊らされた行為者達がいや増す新自由主義のグローバル化によって深化する不平等の増大に対して警鐘を鳴らすことが重要とされる。そして「第三の道」はこの不平等の増大を隠蔽するものとして非難される (Bourdieu 2000)。この差は結局どういったことをめぐってのものなのか？ これまでの議論を敷衍してやや大局的に語ればこうなる。

(M) グローバル化に代表される現在の時代の不透明さは、その中で生きる行為者達の知識能力のゆえなのか、それともその欠如のゆえなのか？

(N) また、そうした時代において、「良き社会」を構想することは可能か？ あるいは、その構想の基準となりうるものを置くことは可能か？

ギデンズと比較すれば、ブルデューは一般の行為者を少なくとも『利口』では(必ずしも)ない存在として前提視することから論を起していることは明瞭であろう。現在という時代

が不透明なのは「行為者達には『真理』『真実』が実は見えていないから」なのである。そのような中で社会学者には「真理」「真実」へ向けての道案内人として社会の客観化(客観化の客観化)作業への従事が求められる。そして、その「真理」「真実」への行為者達による漸近を転轍機として『自由の幻想』からの解放がうたわれる。象徴的暴力の作動に気づかないうちは「自由の幻想」なのであり、不平等・支配関係の黙認を帰結する。ブルデューにとってはここで社会空間を設定し、そこに配置された各行為者たちの非対称的な支配関係の詳細な吟味、またその支配関係の漸減に努めることこそが未来への展望となっており「良き社会」の理想像の核となっている。ギデンズには用意されていなかった「良き社会」の基準、これを彼は確保していると言えるであろう。

しかし、である。一般の行為者が『利口』では(必ずしも)なく、また社会空間といった社会学者の構築物に各行為者をマッピングしてしまうことは、他方で彼ら行為者達の能動性を実際のところは否定してしまうことに行き着きかねない。社会学者が少数の前衛として人々を導けるのか？ これもたぶんに怪しいものがある。

人間はどういった能力を持つのか、良き社会の構想を打ち出すことは是か非か、そこに関わる社会学者の立場はどうあるべきなのか？ こうした根本的な問題意識が『野郎ども』研究を参照点としたギデンズ、ブルデュー両者の比較によって浮かび上がってこよう。知識能力を行為者に強く前提したギデンズにあってみれば、社会はどんどん変化していくとされる。しかし、行為者達は何を問題に感じて社会に介入すれば良いのか？ とにかく社会は変化していくのだし、どう変化するのかも分からない中で。対

してブルデューは社会空間をまるで社会に生きる全行為者の標本箱のように持ち出す。しかし、昆虫採集よろしくピンでとめられたかのような行為者はその中でどのように蠢くのか？そしてそれを眺望する社会学者は何を思うべきなのか？この論考はここでひとまず終えることとする。

【付記】本論文は2003（平成15）年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

注

- (1) 例えば、Giddens (1984) の特に第6章などを参照のこと。
- (2) 宮島編 (1995)、特に序論「文化と実践の社会学へ」（宮島）を参照のこと。なお、宮島の根本的研究関心は「マイノリティ」にある。その点、宮島がギデンズの再帰性 (reflexivity) 概念とブルデューの戦略 (stratégie) 概念の類似性をてこし両者を総合化させる方向で自らのマイノリティ研究視座の軸としているのは首肯できる。ただし、本稿では敢えて差異を際立たせることでギデンズの「担保を欠く批判理論」の特徴を照射したい。ちなみに、両者とともに「構造化主義者 (structurationist)」と分類し考察を加えているものとして Parker (2000)。パーカーは両者の差異にも注目を喚起する。「エージェンシー (agency) は相対的に構造を『弱める』か『強める』かによって切り縮められる」(Parker 2000: 103)。「弱める」のがギデンズであり、「強める」のがブルデューの特徴である、と。しかし、本稿は特に行為者 (actor) の考察の点では基本的にこのパーカーの指摘に同調するものの、パーカーが主体-構造の二項対立のより適切な乗り越えの模索の中で両者の差異を指摘するに留まる

のに対し、ここでは「担保を欠く批判理論」をめぐる考察に資するための幾つかのポイントを浮かび上がらせるために両者の差異を指摘する。

- (3) なお、Giddens (1979) においては、イデオロギーは「言説に言及するものとしてのイデオロギー」と「生きられる実存の様式への信念の関与に言及するものとしてのイデオロギー」とに区別され、この両方の分析が必要であることが述べられている (Giddens 1979 = 1989: 特に200-18)。これは実践的意識、無意識における知識能力の歪みの可能性をも彼は問題として気づいていたことを窺わせる。しかし、特に「生きられた実存」のレベルの分析のあり方に対してはほとんど考察がなされず、ただ、イデオロギーの浸透が次のように言及されているだけに留まっている。「ルカーチは、物象化が、知的言説に浸透していく現象であると同時に、生きられる体験を基礎づける自明性にもひろくいきわたる現象であることを明らかにしている」(Giddens 1979 = 1989: 216)。本文で引用した Giddens (1984) に至っては実践的意識レベルのイデオロギー効果という問題意識が非常に希薄化されていることが分かる。
- (4) ブルデューの実践 (pratique) はそれを産出するハビトゥス (habitus) が「意識と無意識」の「二者択一の虜」から逃れている (Bourdieu 1980 = 1988: 87) という言及にもあるように、ギデンズの実践的意識にはほぼパラレルな位置づけを有しているといえよう。
- (5) ギデンズ自身がブルデューのハビトゥス概念導入を評して、「社会生活は本来、再帰的である」ということ、また構造の二重性について、「ブルデューの観点は、私が示そうとしている観点に、ある点では類似している」(Giddens 1979 = 1989: 239) と述べている。
- (6) これには、「このことで、私は、人びとが、かつてそうであった以上に聡明 (intelligent) になっ

ていると言うのではない」(Giddens 1994 = 2002: 18)、と続く。しかし、「利口な clever」と「聡明な intelligent」の差は一般的に前者が若干物事の理解などに要する時間の素早さをニュアンス的に表すだけで大きな差はなく、またギデنز自身何ら説明を付与していない。「利口な」人々による再帰性の増大だけが強調されている。

(7) ちなみにブルデューならば、こうした点での社会学者の難問は「客観化の客観化」を絶えず社会学者に対し要求し続けることで解消の方向に漸次

進んでいく、と考えることであろうが (Bourdieu 1980 = 1988: 特に第1章)。

(8) 実際にはギデنزは次のように述べ、行為者間での権力の多寡を指摘している。「支配の構造は、資源の非対称性をともなっており、これによって相互行為システム間の権力関係を確保している」(Giddens 1979 = 1989: 71)。問題は、この非対称性をさらに深く分析的に扱う試みをギデنزがなしていないことである。

## 文献

- Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Minuit. (= 1989, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン I』藤原書店; 1990, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン II』藤原書店.)
- , 1980, *Le sens pratique*, Paris: Minuit. (= 1988, 今村仁司・港道隆訳『実践感覚 1』みすず書房; 1990, 今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳『実践感覚 2』みすず書房.)
- , 1987, *Choses dites*, Paris: Minuit. (= 1991, 石崎晴己訳『構造と実践』藤原書店.)
- , 2000, “Pour une nouvelle Aufklärung européenne.” (= 2002, 加藤晴久訳「知識人とは何か——新たなヨーロッパ啓蒙主義のために」加藤晴久編『ピエール・ブルデュー 1930-2002』藤原書店, 177-90.)
- Giddens, Anthony, 1979, *Central Problems in Social Theory*, London & Basingstoke: Macmillan. (= 1989, 友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社.)
- , 1984, *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity Press.
- , 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity Press. (= 1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結』而立書房.)
- , 1993, *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretive Sociologies*, Second Edition, Cambridge: Polity Press. (= 2000, 松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法基準 [第2版] ——理解社会学の共感的批判』而立書房.)
- , 1994, *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Cambridge: Polity Press. (= 2002, 松尾精文・立松隆介訳『左派右派を超えて ——ラディカルな政治の未来像』而立書房.)
- , 1998, *The Third Way: The Renewal of Social Democracy*, Cambridge: Polity Press. (= 1999, 佐和隆光訳『第三の道 ——効率と公正の新たな同盟』日本経済新聞社.)
- ed., 2001, *The Global Third Way Debate*, Cambridge: Polity Press.
- 貝沼洵, 1996, 「ギデنز —— 構造化論の射程」北川隆吉・宮島喬編『20世紀社会学理論の検証』有信堂, 229-62.
- 宮島喬編, 1995, 『文化の社会学 —— 実践と再生産のメカニズム』有信堂.

小内徹, 1995, 『再生産論を読む——バーンステイン, ブルデュー, ボールズ＝ギンティス, ウィリスの再生産論』東信堂.

大前敦巳, 1992, 「P. ブルデューの『対抗文化』論—— P. ウィリス『野郎ども』研究との対比を通じて」『ソシオロジ』36巻3号, 37-52.

Parker, John, 2000, *Structuration*, Buckingham & Philadelphia, PA.: Open University Press.

杉山光信編, 1989, 『現代社会学の名著』中央公論社 (中公新書).

Willis, Paul, 1977, *Learning to Labour: How Working Kids Get Working Class Job*, Fairborough: Saxon House. (= 1996, 熊谷誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』ちくま学芸文庫.)

(とみた かずゆき、日本学術振興会、aaf32540@pop06.odn.ne.jp)

## **An Examination of Giddens' "Critical Theory without Guarantees"**

*TOMITA, Kazuyuki*

Regarding Giddens' evaluation of Willis' *Leaning to labour* as a clue, and at that time comparing Giddens with Bourdieu, this paper raises three questionable points of Giddens' critical theory without guarantees clearly. The points are about his notion knowledgeability, definition of sociologist, and notion dialectic of control.